

がん哲学外来をテーマにした映画
演出・監督 野澤 和之

樋野興夫先生の提唱するがん哲学のドキュメンタリー映画の撮影を始めて半年が経ちました。

思えば、映画を創ろうと決めたのは、3年前。そのうちに私が大腸がんに罹り一時中断。体力が回復して再スタートを切ったのが、昨年夏。多くの方の協力を得て現在に至っているわけです。

私は、手術をしたものの抗がん剤治療はやっていません。転移はしていますが、まあ、なるようにしかならないと覚悟を決めてからは普通に生活しています。私自身が、がんと共に生きるサンプルなわけです。現在の自分の状況を言葉にすると、樋野先生のいつもおっしゃる「不思議だね」という心境です。

撮影には、実に多くの方々の協力を得ています。何人かのがん体験者が映画に登場しますが、みんな尊敬すべき方々ばかりです。がんであることを映画で公表するのは勇気があることです。がんという病は、まだまだ偏見の生まれやすい病ですから。それを承知で映画出演を快諾していただいています。映画完成の後、少しでもがんという病の忌わしき偏見を拭い去りたいものです。これまで取材に協力していただいた皆様、本当にありがとうございます。

昔と違い、がんイコール死という風に捉えるのではなく、がんと共に生きる術を日常的に持ってもらいたいものです。福井新聞の記事にも取り上げていただきました。「がんと生きる希望に」という表題がついていました。その通りです。私は、映画が、がんとともに生きる社会の在り方を考えるきっかけになればと願っています。希望こそが生きる力をくれると信じています。

“空っぽの器”で在ること
松本カフェ主宰 齋藤 智恵美

昨年のコーディネーター養成講座のグループディスカッションのテーマ「がん哲学外来の原点」は、その直後のがん哲学「松本カフェ」を開設することになっていた私に“空っぽの器”というとても大切な問いを投げかけてくれました。佐久の「ひとときカフェ」や「あうんの家」の皆さんに多くのサポートを頂きながら細々と月1回開催してきたカフェ。がんになったからこそ“哲学を語り合う場”を創りたいと意気込んでいた私でしたが、実際には場所とお茶・お菓子を用意するのが精一杯でした。

そんな中、がん哲学外来のドキュメンタリー映画を制作されている野澤和之監督とのご縁を頂き、映画への出演協力をするようになりました。映画の中で重要な意味を持つ“哲学”ですが、主催者である私は持ち合わせていませんでした。そんなファシリテートも下手、哲学も語れない困った主宰者の「松本カフェ」に、参加者の方々のぬくもりある哲学がたくさん集まりました。

参加者の方々の言葉は、時に哲学的に時に愛情深くそれぞれの心を支え合い、カフェは自然と哲学が集まる温かい器になっていました。「カフェの時は自分の経験や価値観は家に置いてくるようにしている…」、家族・遺族のカフェをやっている女性から聞いた言葉が今でも私の指針となっています。「自らの力で立ち上がることを焦らず信じて待つこと」、「空っぽの器で在ること」。今後も私がカフェの中で学び続けていきたい素敵な哲学です。



がん患者と医師、看護士ら「来、をテーマにしたドキュメンタリー映画の撮影が1日、福井市の県済生会病院で対話を重ねる「がん哲学外来」の撮影が1日、福井市の県済生会病院で行われた。監督で自ら大腸がんの経験がある野澤和之さん(64)東京都は「深い愛情がある言葉は、患者の大きな力になる。がんとともに生きる」という希望の作品にした」と話している。映画は今秋に完成予定。

がん哲学外来は2008年、順天堂大学の樋野興夫教授が提唱。現在は県済生会病院など全国約130カ所で行われているという。

この日は、テابلを挟んで患者と向き合う県済生会病院の医師や看護士を撮影。カメラマンは、乳がんを患った女性が、胸の膨らみを補うパットを手觸みしながら看護士と笑顔で話し込む様子などを、少し離れた場所から映像に収めていた。

同病棟でがん哲学外来を担

がんと生きる希望に

闘病経験の監督が映画撮影

県済生会病院「哲学外来」テーマ

福井市の県済生会病院で行われた。監督で自ら大腸がんの経験がある野澤和之さん(64)東京都は「深い愛情がある言葉は、患者の大きな力になる。がんとともに生きる」という希望の作品にした」と話している。映画は今秋に完成予定。

がん哲学外来は2008年、順天堂大学の樋野興夫教授が提唱。現在は県済生会病院など全国約130カ所で行われているという。

この日は、テابلを挟んで患者と向き合う県済生会病院の医師や看護士を撮影。カメラマンは、乳がんを患った女性が、胸の膨らみを補うパットを手觸みしながら看護士と笑顔で話し込む様子などを、少し離れた場所から映像に収めていた。

同病棟でがん哲学外来を担

福井新聞

6月2日(土)

新渡戸福造 軽井沢夏季学校
～校長就任 100周年記念を迎えて～
第2回 軽井沢夏季がん哲学学校

<p>【開催日時】 平成30年7月16日(月・祝日) (開場 13:30) 14:00～16:20</p> <p>【会場】 シオン軽井沢 (東邦ホールディングス研修施設 2階)</p> <p>【定員】 約80名</p> <p>【参加費】 無料 ※申込み等は裏面をご覧ください。</p>	<p>【基調講演1】「新渡戸先生の机」 恵泉女学園 理事長 宗曹雅幸氏 元富士フィルム 社長</p> <p>【基調講演2】「女子高等教育と新渡戸福造」 東京女子大学 理事長 氏家純一氏 野村ホールディングス 名誉顧問</p>
<p>【開会挨拶】 信州大学医学部附属病院 脳神経外科 教授 本郷 一博 氏</p> <p>【司会】 信州大学医学部附属病院 信州がんセンター長 小泉 知展 氏</p>	<p>【総括・閉会】「国際教養と新渡戸福造」 順天堂大学 教授 樋野興夫氏 国際教養学部教授(兼任)、医学部病理・腫瘍学教授 一般社団法人がん哲学外来理事長</p>

■主催 軽井沢夏季がん哲学学校

■協賛 東邦ホールディングス、東邦薬品 共創未来ファーム、ファーマクラスター

■後援 信州大学、恵泉女学園、東京女子大学 順天堂大学、軽井沢図書館、信濃毎日新聞 万寿温泉日進館

当する宗本義則・集学的がん診療センター長は「言葉を受くことで、患者は前向きになれる」と語る。治療が続ける上でプラスになると効果を説明。野澤監督は「がん患者に掛ける言葉に徹底的にこだわり、言葉の処方箋を作品で紹介したい。がんとともに生きる社会の在り方を考えるきっかけになれば」と話している。

県によります、2013年には県内でがんが診断されたのは再発を除き9511人、08年は5508人に増加傾向にある。治療後の生存年数を延ばす、がん患者は増え続けているとみられる。(堀野 彦)

申込先：03-6838-2908 (FAX) 担当：源川達也